

最近の中国における五四運動研究について

狭 間 直 樹

ここ二、三年の中国の歴史学界は、プロレタリア文化大革命の時期とは様相を異にし、刊行物の盛行に端的に締められるように、確実に新しい局面を迎えている。《歴史研究》等の再刊、《中国史研究》等の創刊、各大学学報の公刊といった定期刊行物だけをみてもそれはいえようし、とりあえず旧版の再印が主流になっているとはいえ、単行本の出版にもその変化はあらわれているのである。

諸刊行物を概観してみると、儒法闘争史や“あてこすり”史学にたいする批判、それと表裏の関係をなす、文化大革命中に批判・打倒された歴史学者の名誉回復といったものが多く眼につく。しかし、同時に個別のテーマに即した具体的な研究も着実に蓄積されていることもそれらの書物からみてとれる。それらのすべてについて触れる能力は私にはないので、ここでは五四運動研究に焦点をしぼり、中国歴史学界の現在の状況について、その一端を見ることにしたい。

五四運動研究をとくにとりあげるのは、大状況的には、五四運動60周年ということで今年になってかなり大量に成果が公刊され、そこには中国歴史学界の現状がよく反映されている、と考えるからである。実際、今年には1959年の40周年につづく、五四運動研究の成果公刊の第二のピークをなす年なのである。そして小状況的には、私たちの共同研究がいま五四運動の時期すなわち“民国初期の文化と社会”を研究テーマにしており、私の個人的関心がそこにあるからでもある。

五四運動60周年と銘うつかどうかは別として、資料集の刊行、学術討論会の開催、研究論文の発

表等々にみられるように、今年の前半に中国歴史学界のかんりのエネルギーがこの方面に注がれたことは明かである。以下に、それぞれの問題について簡単に紹介し、意見をのべてみたい。

まず最初に資料集について、《五四運動回憶録》《五四愛国運動》《五四時期的社团》の三つをとりあげる。いずれもきわめて有用な資料集であるが、とりわけ最後のものは画期的な成果である。

《五四運動回憶録》上下2冊は、中国社会科学院近代史研究所（主力は丁守和、黄国華、邱权政の3氏）の編になり、今年3月に中国社会科学出版社から刊行された。A5判、1,000余ページの大部のもので、124篇（74万余字）の回想の文章を収める。

1959年4月に刊行されたまったく同名の回想録（中国科学院歴史研究所第三所編——第三所はいまの近代史研究所の前身）には41篇（16万字）の文章を収めている。編者と書名は同じでも、その分量においてあまりにもかけ離れたためか、今年出版のものには1959年本との継承関係についてはなにも触れられていない。しかし今年のものには、1959年本所収のものが基本的にはすべて収録されているのだから、やはり一種の増訂新版と考えてよいだろう。この新版所収回想文には文末に典拠を示してあるが、1959年の旧版については《五四運動回憶録》《五四回憶録》と両様の表記があり、さらに旧版が基づくところあるものはその典拠名があげられているため、やや対照に不便である。調べてみると、旧版のうちの6篇だけ収録

されていないものがあるが、それらもより内容豊富な別の文章で補われている。基本的にすべて収録されている、という所以である。

別の文章が採られているものの一例は張秀熟<五四運動在四川の回憶>である。これは《光輝的五四》(1959年4月)から採られている。旧版は張秀熟の同名の回想を収めているのだが、それは1959年3月の改訂稿であって、《光輝的五四》のは同年2月の初稿である。改訂がどこされているのは、巴金等のアナキズム運動の部分であって、それを削除し、かえるに一般的な叙述をもってしているのである。改訂されねばならなかった事情については詳らかにしないが、資料的には初稿の方が有用なのだから、新版の編集方針は研究者の歓迎をうけるだろう。

新版所収の124篇のほとんどは、主として解放後の新聞、雑誌等ですでに公表された文章の再録である。もちろん、既発表のものといっても日本で見られぬものもいくらかあり、くわえて新たに発表されたもの(10篇?)もあるわけだから、本書によってうける利益は相当なものである。新発表のもので、羅章龍<回憶北京大学馬克思學說研究会>は今回の名誉回復とからんでいるのだろう。また、李維漢<回憶新民学会>は、もと《五四時期社団》のために書かれたものらしいが、その詳細な人名注ともあいまって、資料的価値が高い。要するに、本書は現時点における回想録の決定版といってよいものである。

つぎに《五四愛国運動》上下2冊である。これも近代史研究所の近代史資料編輯組(榮孟源主編、莊建平編)の手になり、今年3月に中国社会科学出版社から刊行された。A5判、1,100余ページ、18篇(103万余字)の文献を収め、ほかに写真63点を附録する。

本書は、書名からも窺えるように、《近代史資料》総24号の《五四愛国運動資料》(1959年4月、9篇77万字)の増訂版である。増訂されたのは、

すでに《近代史資料》で発表された7篇の文献、および今度新たに発表された周恩来<警庁拘留記>、同<検庁日録>の2篇である。

収録された資料はいずれも五四運動研究の基礎となる重要資料であるが、とりわけ周恩来の新資料2篇は、1920年前半の天津における運動の実態を権力側とのかかわりを明かにするものとして貴重である。<警庁拘留記>は、警察の弾圧がいかに陰険に行われたか、拘留の具体的状況はどのようなであったかを「客観的」に記し、直隸省警務処長兼天津警察庁長楊以德の学生にたいする融和的態度をいきいきと述べている。これらの記述を読んでいくと、運動にたいする警察の弾圧のきびしさと同時に、当時の学生のエリートとしての社会的地位がおのずと浮かびあがってくる。もちろん空前の民族的危機意識にささえられてのことではあるが、日本商品の調査、発売禁止といった学生の「超法規的」活動が可能とされた社会的背景の一端を理解できるというわけである。また<検庁日録>からは、拘留中の学生たちが学習活動のなかでマルクス主義を受容していく状況が明かにされ、五四運動を転機に急進主義者が共産主義者に成長していく過程を知ることができるのである。

なお本書に附録された63点の写真は《近代史資料》にかつて発表されたものを主としているが、新たに発表されたものも多いようである。いずれもきわめて貴重なものであることはいうまでもないが、惜しいことに印刷がきわめて不鮮明だから、既発表のものは《近代史資料》を見なければならぬ。もっと鮮明な写真集の公刊が待たれる。

ちなみに《五四愛国運動資料》とならぶ重要資料集、上海社会科学院歴史研究所編《五四運動在上海資料選輯》(1960年6月)も重版された(学術月刊、1979年5月)らしいが、寓目の機会を得ない。

最後に《五四時期的社団》4分冊である。本書は張允侯、殷叙彝、洪清祥、王雲開氏の編著にか

かり、今年4月に三聯書店から刊行された。A5判、1,900余ページ(155万字)に、主として収録資料の封面よりなる写真約70点を附録している。

本書は10数年前に完成しており、紙型までとったのに、「林彪」「四人組」および「四人組」と密接な関係にあり、いっかんして「理論権威」をもって自認していたあの人物の抑圧」をこうむって出版できなかったのを、四人組打倒後のいま、おなじく抑圧されていた他の書物とともに出版できた、という。その運命をいとおしみ、かつ郭沫若を記念するためでもあろうが、1962年に郭氏の書いた「題名」が写真版附録としてはさみこまれていたのも珍らしい。

編著者の4人はみな、1958年11月から翌年12月にかけて刊行された、中共中央馬克斯・恩格斯・列寧・斯大林著作編訳局研究室編著《五四時期期刊介紹》3分冊(2,900余ページ、305万字。ただしそのうちの半分は目録)の仕事に携わった方がたである。書名どおり、《五四時期期刊介紹》が期刊(雑誌)の紹介、解題なのをたいし、《五四時期的社団》は社団(団体)の歴史、性格についての資料集である。社団の説明にはその団体の刊行物がもっとも重要な資料であるから、両書は基本的に同じ材料を用いているのだが、その説明対象の相違からして、おのずとまったく別の書物となっている。

五四時期が何年から何年までを指すかについてはまだ決定的な分期はないが、本書でとりあげられているのは、1917年から1923年までに設立された社団である。ただし、その時期のものすべての社団が含まれているのではなく、中国共産党をはぐくむ母体となったもの、ないしは広義の社会主義的傾向をもつ進歩的社団だけがその対象である。すなわち、長沙の新民学会を筆頭に、武昌の互助社・利群書社、北京の少年中国学会等21団体と合作主義小団体(12団体)、無政府主義小団体(24団体)がそれである。

それぞれの社団について、該団の刊行物を主に参考資料を博搜し、その成立、発展、分裂、消滅の軌跡を明かにするように編輯されているが、会員名簿や会議等については一覧表の形式に整理され、対校、注釈についても周到な配慮がなされている。このように関連資料が整理して提供されることの便宜はここで云々するまでもないところである。

たとえば、新民学会の成立について本書では、<蕭三日記摘抄>を掲げて1918年4月14日に成立したことを明かにしている。(巻頭の写真のトップもその部分である)《五四時期期刊介紹》の<新民学会通信集>の項の説明で4月18日とされていたのは、これによって正されたわけである。また新民学会会員のマルクス主義への傾斜を示すものとして、蔡和森の毛沢東宛書函が有名だが、期刊介紹では<新民学会通信集>から断片的に引用しているにすぎないのを、本書では「節録」とはいえ長文が収録され、思考の具体的な様相を十分に把握できるようになった。

《少年中国》にしても日本では第1巻しかみられないのだが、本書から1925年の活動停止までのことをすべて知ることができるし、アナキズム雑誌も24小団体の説明と<五四時期無政府主義報刊一覧表>とあわせて約80種を数えることができ、そのほとんどが1922~23年に集中していることもわかる。また匡互生<五四運動記実>(近代史資料、総13号。五四愛国運動にも収録)などからかなりラディカルな組織とのイメージを勝手に作りあげていた工学会について、本書によって偏向を是正されたことも、告白しておかねばならない。

ただ、整理編集のさいにもう少し配慮してほしかった点もある。小さいことでは、第四冊の<民鍾社出版的書籍>という表では、それらの書籍の広告を掲載した《民鍾》の巻号、発行年月を注記してほしかった。アナキズム運動の一中心である広東省新会県で発行されたこの雑誌は、この種の

ものとしてはめずらしく1922年から1927年にかけて23冊も発行されているのだから、何年何月のものかがどうしても必要なのである。また、大きなことでは、望蜀の言たることを承知のうえだが、《新青年》社や《民声》社などもとりあげてはしなかった。共産主義小組関係がはぶかれていることからみて、あるいは党関係のものが別に準備されているのかもしれないと思うが、もしそうなら一日も早い刊行を望むものである。

とにかく、本書は“整理された資料集”として《五四時期期刊紹介》とならぶ画期的な労作である。このような有用な書物の出版がある勢力によって抑えられてきたということはなかなか理解しにくいことだが、マルクス主義の歴史研究にとって隠されねばならぬ事実はなく、事実を事実として確定することが研究の出発点のはずである。本書の刊行は五四運動研究の重要な一礎石となるだろうが、さらに原件の影印刊行が望まれる。

二

資料集の刊行も60周年を記念してのことではあるが、記念事業の中心は、やはり中国社会科学院のよびかけで5月2日から9日にかけて北京で開かれた五四運動60周年記念学術討論会であろう。それよりさき、3月下旬から4月はじめにかけて歴史学研究企画会議が四川省成都で開かれ、1985年までの研究計画がたてられたとのことだが、その直後の五四の学術討論会は四人組打倒後、最初の大規模な歴史学界の会議であった。それにつづく太平天国史学術討論会には日本からも小島晋治、堀川哲男、並木頼寿の3氏が参加されたので、その概容は本誌所収小島報告を参照されたいが、五四の討論会についてはまだ詳細はわからない。

いま中国の学術界では“百家齊放、百家争鳴”の方針が強調されているが、五四の討論会もその方針の具体的実践として開かれたことは明かであ

る。《歴史研究》1979年5月号の学術動向欄に引用された〈開催通知〉ではこういっている。“五四運動は偉大な思想解放運動であった。「实事求是」を提唱し、すべては実際から出発し、理論と現実を結びつけ、大胆に思想を解放すること、これがこの度の討論会の基本精神である。”

この基本精神をふまえて、つぎの課題が設定される。“「五四」時期には民主と科学を提唱した。わが国が新しい発展期にさしかかっている現在、民主を発揚し、法制を強化し、科学を繁栄させることは特別の重要な意義をもつことであって、新しい状況と新しい問題に立脚しつつそれらのことを強調して論じなければならない。”これが第一である。ついでこうもいう。“五四運動はまた徹底して封建文化に反対した運動であった。五四運動60周年を記念することは、当面する文化面での問題にたいして研究を行わねばならないということである。「五四」新文化運動の経験と教訓をくみとるために、外国文化と中国の旧文化に対する正しい対処法、および「四人組」の文化専制主義蒙昧主義の流毒の掃蕩についても強調して論じなければならない。”これが第二である。

思想解放、实事求是の基本精神については万人の肯うところであろう。民主と科学というのは実は封建文化反対運動の二大スローガンなのだが、いささか力点をずらして二つの課題が設立されているのである。

さる6月、中国学術代表団の一員として来日された近代史研究所副所長黎澍氏の講演〈中西文化問題〉は、五四討論会での報告をもとにしたものとのことだが、それは清末から五四にかけての時期における西洋近代文化摂取の問題を歴史的に史実をふまえて概観したものだった。そこでは魯迅の“拿来主義”あるいは毛沢東の“糟粕を捨てて精華を摂る”方針で大胆に外国文化を摂取することが呼びかけられ、あわせて林彪、四人組の鎖国主義、蒙昧主義が糾弾されていた。その点で〈開

催通知〉の提起した課題に答えた報告なのである。

これは短い報告だから一つの問題だけを明かにしようとしたものであることは間違いない。したがって、討論会全体の空気を知るにはちかく公表されるはずの報告書をまつほかはないが、〈開催通知〉では、五四運動の反帝国主義の側面にくらべて反封建主義の側面が強調されすぎているかに見える。げんに5月3日に開かれた五四運動60周年記念集会で党中央を代表した華国鋒の講話では、こういっている。“五四運動は帝国主義と封建主義に反対する徹底した、非妥協的な革命運動であった。”“五四運動は偉大な愛国運動であり、偉大な新文化運動でもあった。わが国が半植民地・半封建の社会で深刻な民族的災禍にみまわれたその決定的時機に、革命的青年は奮起して帝国主義と売国政府に反対し、民族の独立と解放をもとめ、国家の進歩と富強を要求するとともに、民主と科学の提唱につとめた。この栄えある伝統はひじょうに貴重なものである。”（北京周報、1979年19号）

この講話では反帝国主義と反封建主義の両側面があわせて提起されていることから推測すれば、現在の歴史学界では、その一側面すなわち反封建主義、民主と科学の二大スローガンの歴史的意義の解明と宣伝が主要な課題と位置づけられているのかもしれない。もしそうだとすれば、それは新しい局面を特色づける傾向とされてよいだろう。

三

学術討論会の開催と併行して《歴史研究》1979年5月号は“記念五四運動60周年専号”として出され、また各大学の学報等にも記念的な論文、回想等が掲載されている。たとえば五四運動のシンボル、北京大学の学報1979年2期は許德珩〈紀念「五四」話北大——我与北大〉なる回想と魏常海〈李大釗同志对封建旧道德的批判〉、孫玉石〈魯迅与《新青年》〉の二篇の論文を載せるが、これ

はきわめて穏当な組みあわせである。

学報等の論文でも、やはり、反封建主義の側面の強調、すなわちその視点よりする分析が普遍的であるようだ。もちろん、各地の特色をいかして、たとえば《南開大学学報》1979年2期が周恩来や覚悟社についての文章をのせ、四川省社会科学院研究部主弁《社会科学研究》1979年2期が四川での五四運動や郭沫若、吳虞に関する文章をのせるといったことはあるし、回想、資料などに特色を出しているものも多い。しかし、なんといっても各誌の五四関係論文をつらぬくライトモチーフは反封建主義、民主と科学の二大スローガンの闡明にある。

それをもっとも端的にしめす編集は《復旦学報》1979年3期である。“記念五四運動60周年”と銘うって17篇の文章を収めているが、その巻頭に本刊編集部〈紀念“五四”，堅持社会主义道路〉、ついで〈“五四”時期民主与専制主義的闘争〉〈“五四”時期科学与蒙昧主義的闘争〉をのせる。（後二者は同じ3人の筆者の共同執筆である）五四時期のデモクラシーとサイエンスの旗印のはたした歴史的役割の解明を通じて四人組の反民主、反科学を糾弾するという点で、記念学術討論会の〈開催通知〉の精神と軌を一にしているわけである。

それらの民主と科学を強調する論文の論理的骨組はどのようなものなのか。もちろん各文章それぞれにちがいがあがあるが、しいてまとめてみるとこうである。すなわち、封建制から資本主義への移行には民主と科学が不可欠であった、資本主義から社会主義への移行にはなおさら不可欠である、しかるに林彪・四人組は五四精神・党の伝統にそむいて文化専制主義・蒙昧主義をもって社会主義民主とプロレタリア科学を破壊した、いまや民主と科学の旗をたかくかかげて四つの現代化に邁進せねばならぬ、というのである。

五四時期に民主と科学が封建主義に反対する重

重要な武器であったこと、およびそのたたかいの成果を正しく継承せねばならぬという点については、だれしも異論はないだろう。そして、ことからのある側面を強調することによって時代の特徴をよりよく把握できることがあることも、一般的に認められるところである。ただ、それらの諸論文ではこの反封建主義の一面を強調することと半植民地中国の課題だった反帝国主義の側面との関係いかんが十分に展開されていないように思えるのである。たとえば《歴史研究》1979年5月号の耿云志〈胡適与“五四”时期的新文化運動〉は、ブルジョアジーの遺産こそプロレタリアートが社会主義の科学文化を建設する直接の出発点であり、必要不可欠な前提であって、この段階を跳びこえて直接に封建文化遺産のなかから社会主義の新文化を錬成しようとしても、それは根本的に不可能である”とのべている。半植民地半封建社会では、ブルジョアジーの遺産が直接の前提なのではなく、新民主主義革命によって止揚されたそれが社会主義建設のための前提だったのではないか、との疑問が残るのである。

個別の論文については、それぞれ教えられるところが多いが、テーマとして注目させられたのは陳独秀と胡適が《歴史研究》と《復旦学報》で大きくとりあげられていることである。とりわけ、後者では、前述の3篇をのぞいた10篇の論文のうち陳独秀関係3篇、胡適関係4篇、他は陳望道、魯迅、瞿秋白というぐあいなのである。

陳独秀の評価について、《歴史研究》の丁守和〈陳独秀和《新青年》〉はこういう。新民主主義革命期の人物評価は、党史、革命史、党の指導者といった“政治問題”にかかわるがゆえにたいそう困難である、林彪、「四人組」とかれらのかの顧問が横行していた時期には、多くの同志が論文や授業中に陳独秀の前期の実際情況に言及したために、いろいろな罪状をかぶされてひどく打撃をこうむった、しかし“……史的唯物論の原則に

もとづき、問題を一定の歴史的範囲内で提起し、实事求是的に全面的な歴史評価をおこなわねばならない、”と。

同様のことは胡適評価にたいしてもいわれている。《復旦学報》の朱文華〈試論胡適在五四新文化運動中的作用和地位〉は、これまでの胡適にたいする全面否定ともいうべき、最初から革命の成果を奪いとうとの野心をいだいて新文化陣営中にもぐりこんできた「大スパイ」といらた評価を排し、文学革命での役割を正当に評価せよ、といている。そして、白話文運動の提唱者としての功績はいうまでもなく、悪評たかいプラグマチズムも当時における封建主義文化との対立面を重視して、その進歩的役割が評価されているのである。さらに、この評価法を“台湾香港等地の錢穆ら”に分らせて祖国統一に貢献しようと主張した文章(復旦学報同上号、全増嘏等論文)まであるのには驚いた。

人物評価の細かな点については、たとえば胡適の反動化をいつからと見るかで、耿云志氏が蔣介石政府とのかかわりにもとめるのにたいし、朱文華氏が段祺瑞政府のときの善後会議参加におくといった差異がないわけではない。しかし、いずれも五四時期における積極面、進歩的役割の評価については、両者をとりあげたどの論文も一致しているのである。当時の歴史的条件のなかで人物を評価しようという、实事求是の方針に私は賛成だが、百花斉放、百家争鳴の状況が定着するためには、林彪・四人組も“禁区”にしない活発な討論が展開されることが必要であろう。陳独秀、胡適のみならず、すべての歴史人物にたいする問題提起がなされることを願ってやまない。

末筆ながら、筆者の力不足から、必要なものを網羅しえていないし、さらに各位の文章のよみちがいなど誤ちを犯している点も多いと思うが、読者諸賢の御叱正をお願いするしだいである。